



HAL
open science

CEFRB1 レベル正書法の把握に関する考察-カタカナ語に注目して-

Michiko Nagata

► **To cite this version:**

Michiko Nagata. CEFRB1 レベル正書法の把握に関する考察-カタカナ語に注目して-. [Research Report] Katholieke Universiteit Leuven; Université Stendhal - Grenoble III. 2012. <hal-02568433>

HAL Id: hal-02568433

<https://hal.science/hal-02568433>

Submitted on 9 May 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

CEFR B1 レベル 正書法の把握に関する考察

—カタカナ語に注目して—

永田道子

1. グリッドの解釈と考察のポイント

1.1 正書法の把握 - CEFR のグリッドから -

CEFR は正書法の把握の B1 レベルを「読者が理解できる、ある程度の長さの文章を書くことができる。綴りや句読点、レイアウトなどは、ほとんどの場合読者を混乱させない程度に正確である (吉島・大島 2008:129) としている、また使用語彙の領域に関しては「家族、趣味や感心、仕事、旅行、時事問題など、本人の日常生活にかかわる大部分の話題について、多少間接的な表現を使ってでも自分の述べたい事を述べられるだけの語彙を持っている」(前掲 p121)としている。つまり、B1 レベルの学習者は自身に身近なテーマであれば、読者が理解できる文章が書け、語彙の綴りも大抵の場合は混乱を招かぬほど正確に書けることが求められると言える。

1.2 考察のポイント

分析にあたって正書法のグリッドから、理解を妨げる要素、混乱を招く要素は何かと考えた時に一番に思いついたのは、正書法と一緒に担当する吉田、また筆者自身勘違いをした大学新聞の記事に登場する「フリーズ」という単語である。両者ともに「フルーツ」の事だと解釈していたが、他の学生の作文を読んで「フリーズ」が「フリッツ」、日本でいう「フライドポテト」の事だという事によりやく気が付いた。つまり綴りのミスが誤解を招いた例である。

また、CEFR では複言語主義を理念として言語使用者の能力を「言語別にバラバラに分かれているのではなく、使用する言語全てを包含する複言語と複文化の能力だ」(前掲 p182)と定義している。さらに複言語主義を具体的に、「(外国語を学ぶ際に構築する)新しいコミュニケーション能力の成立には全ての言語知識と経験が寄与するし、そこでは言語同士が相互の関係を築き、また相互に作用し合っているのである。」(前掲 p4)と説明している。英語の基本語彙を習得している学習者にとって、その知識を日本語の外来語の大半を占める英語起源の語彙習得に活かすにはどうしたらいいのだろうか。どういった問題があるのかを調査し、指導法の手がかりをみつけるために B1 学習者のカタカナ語に注目することにした。

1.3 カタカナ語の分析方法

B1 レベルの学生のカタカナ語における正書法の問題点はなにかを探るために、学習者の誤用を分析する。分析対象は自文化を紹介するというタスクの性質上、カタカナ語の使用が求められると推測される大学新聞の記事とし、合同会議において B1 と評定されたグルノーブル 14 本、ルーヴァン 18 本、計 32 本とした。

2. 事例分析

2.1 特殊音節に関する誤用

カタカナ語の誤用を見ていると、原語を日本語の音韻体系に従って表記する事の難しさが観察された。特に特殊音節である長音と促音、拗音の表記の誤用が多く見られたことから、その特徴を各特殊音節ごとに考察する。

1) 長音にみられる誤用

カタカナ語表記で一番多かった誤用は、長音の表記である。B1 の学習者においても、長音を含むカタカナ語を正しく綴るのは困難であることが分かる。誤用をみてみると例 3 のチーズフォンデュのように、自国の郷土料理に関する語彙、例 7 のスマーティーズという商品名など特殊性が高く、教科書では取り扱われていない未習の語彙に起こると考えられるのではないか。日本語化されたカタカナ語彙に触れたことがない場合、長音の過剰や不足などにみられる問題は、学習者が何かしらを基に日本語化しようとした結果であると言えるが、長音があるのかないのか、どこにあるのかが不確かである事が観察される。

I. 長音の過剰

1. ポテート (L7) ← ポテト
2. ポテトー (L24) ← ポテト
3. チーズフォンデュー (G14) ← チーズフォンデュ

II. 長音の不足

4. ロマ (L19, G7) ← ローマ
5. チョコレト (L24) ← チョコレート
6. フランダス人 (L24) ← フランダース人
7. スマーティズ (L22) ← スマーティーズ
8. クリームチーズ (G29) ← クリームチーズ

III. 長音と促音の入れ代わり

9. チョコレット (L24) ← チョコレート

VI. 長音の位置のずれ

10. ボージョレ (G3) ← ボジョーレ
11. カローリ (G28) ← カロリー

2) 促音にみられる誤用

次に、長音の問題と同じく、原語を日本語化の表記のルールに従って綴る事の困難さに関係があると考えられる、促音の誤用についてみてみることにする。促音の誤用にも、例 15 のように長音との入れ代わりがみられ、一拍があることは認識しているものの、それが長音なのか促音なのかを正しく綴る事の困難さが観察される。

I. 促音の過剰

12. フレンッチ・フライズ (L24) ← フレンチフライ

II. 促音の不足

13. リラクス (L5) ← リラックス
14. フリツ (L7, L27) ← フリッツ

III. 促音と長音の入れ代わり

15. フリーツ (L6) ← フリッツ

3) 拗音にみられる誤用

I. 子音の変化

16. フェスチバル (L18) ← フェスティバル

17. マルジ (G1) ← マルディー

分析の結果から、特殊音節のカタカナ表記に誤用が多くみられたが、問題の改善のためにどのような指導法が考えられるだろうか。

坪根らは外来語表記のルールを教える事に対して、学習者から「ルールを知りたい」また教師から「規則について教えるのが効果的」であるという意見が多かったという調査結果をまとめている。(坪根ほか 2001) CEFR がいう、母語や既習の外国語が相互に作用して新しいコミュニケーション能力を構築していくという複言語主義の立場にたつと、カタカナ語の大部分を占める英語の語彙の知識を日本語の語彙習得に活かすために、英語の発音を日本語化するルール¹を覚えるというのも一つの手段といえるだろう。しかし、坪根らが指摘しているように英語の発音を日本語化させる規則はかなり広範囲に渡り、種類が多いため、学習するには容易ではないと考えられる。また英語が母語でない学習者にとっては、外国語である英語の語彙を日本語化するルールを記憶するというのは難しいかもしれない。

また坪根らは続けて規則比較的新しく入ってきた語や日本語にない音を含むカタカナ語(ウェハース、クェスチョン、イヤホンなど)の表記のゆれについても言及している。それらの事をふまえて「ある程度の語彙が入った時点で基本的なルールを示し、その上で原語の発音とは異なる場合もあることを指摘し、日本語の語彙として定着させることを考えるべきではないだろうか」としている。(坪根ほか 2001)

B1 の正書法のグリッドに、ほとんどの場合は読者を混乱させない程度正確とあるが、著者が「フリーズ」を「フルーツ」の事だと取り違えた、促音と長音の入れ代わりの例のように、どういったカタカナ表記の誤用が誤解を招きやすいかを調査し、まずはそれを避けられるだけのルールを明示的に指導するといった方法が考えられるが、さらなる研究が求められる。

2.2 不注意に起因すると考えられる誤用

1) 濁点、半濁点のミス

濁音、半濁音の誤用は、音韻に関する誤用とは違った現象が観察できるかもしれない。例 18・19 は作文の中で複数回、カマルグ、チーズと正しく綴っているが、そのうち一か所のみ濁点がないという誤用が見られた。これは、ケアレスミスである可能性が高いのではないだろうか。例 20 にも濁点の不足、また 21 のように半濁点を濁点と記した誤用が見られるが、例 18・19 に観察されるように、音韻体系の複雑さに起因する誤用というより、ケアレスミスである可能性が考えられるのではないだろうか。

I. 濁点の不足

18. カマルク (G23) ← カマルグ
19. チース (G28) ← チーズ
20. ファンタシー (L13) ← ファンタジー

II. 半濁点と濁点の入れ代わり

21. ヨーロッパ (L13) ← ヨーロッパ

2) 「ソ」と「ン」、「ツ」と「ソ」の書き分けに関する誤用

I. 「ソ」と「ン」

22. コソテスト (L18) ← コンテスト
23. オラソダ語 (L26) ← オランダ語

II. 「ツ」と「ソ」

24. ユーロビジョン (L18) ← ユーロビジョン

3) ひらがなの混同

I. 「や」と「ヤ」の表記ミス

25. シャピユイ (G2) ← シャピユイ

4) 他の仮名との取り違えの可能性が考えられる例

I. 他の仮名と混同した表記ミス

26. ポテトピュール (L17) ← ピューレ

27. フライドテ° テト (L27) ← フライドポテト

5) 原語をローマ字表記に基づいてカタカナ表記した例

I. Annecy という原語のローマ字「ne」の部分を「ネ」と表記したミス

28. アネシー (G20) ← アヌシー

A1 の正書法のグリッドに「当人の住所、国籍やその他の個人的な情報を正確に書くことができる」(前掲 p129) とあるが、例 21 ヨーロッパ、例 23 オランダ語、例 25 シャピユイ(本人の姓)にみられるように、学習者にとって身近であるはずの語彙に表記のミスがみられる。B1 レベルに達していると考えられる学生であっても、既習語彙をミスのないよう注意を払って正確に表記するというのは困難であるようだ。既習語彙の表記ミスを防ぐにはどのような指導法が考えられるだろうか。

CEFR では産出的言語活動の方略の項目で、モニタリングと修正をレベル別に提示している。B1 のグリッドには「自分が使った言語形式が正しいかどうか確認することができる」(前掲 p69)とある。B1 レベルとは、ここに見られたような不注意によるミスがないか注意を払い始める時期なのかもしれない。B1+のグリッドには、「指摘があれば誤解を招くような表現や自制などの混乱を修正できる」(前掲 p69)とあり、モニタリングを働かせてケアレスミスに気が付くよう指導し、自己修正ができるよう導くことが大切ではないだろうか。

2.3 ルールの過剰般化が考えられる誤用

1) 語原が英語のカタカナ語のルールで表記したことによる誤用

29. クリスマス (L2, G2) ← キリスマス

30. マッセル (L27) ← ムール貝

31. ビールガーデン (L20) ← ビア (ヤ) ガーデン

2) L1 もしくは L2 の影響が考えられる誤用

32. ルーバンス (L19) ← ルーベンス

33. パスクア (G7) ← イースター

例 29 はクリスマスやクリスという英語の固有名詞の表記をキリスマスにも適用した可能性が考えられる。例 30 はマッセルという英語名を使っているが、日本での通称であるムール貝はフランス語+日本語という由来と構造が複雑であり、中々推測が難しい単語かもしれない。また例 32 は画家のルーベンスの事をフランス語の発音でルーバンスと表記している。それから例 33 はフランス語 *pâques* をラテン語 *pascha* か何か他の既習の外国語風にかこうとした様子うかがえる。学習者は、既習言語である英語や、L1 また L2、L3 の語彙を使って表現しようとしているが、外来語の由来は複雑で知識として習得する以外推測が難しい例がある。既知語彙の知識を日本語でのコミュニケーション能力の習得に活かそうとしている学

習者の試みが観察されるが、これこそ CEFR の掲げる複言語主義の概念ではないだろうか。では、既習言語の知識をカタカナ語の習得に活かすにはどうしたらよいだろうか。中山らはカタカナ語の語彙教育について、物理的制約の多い中で必要度の高いものを取り上げるためには、基本語彙の選定が必須であると述べている（中山ほか 2008）B1 の使用語彙の領域にある「家族、趣味や感心、仕事、旅行、時事問題など、本人の日常生活にかかわる大部分の話題」（前掲 p121）のために、また分析対象である大学新聞のように自文化を紹介するタスクのために必要な基礎語彙の選定、そしてその基礎語彙が定着するための指導法を考えていかなければならないのではないか。

例 17 のマルジグラや多くのフリッツの例にもあるように母語の発音をカタカナ表記する際にエラーが生じる場合が多い。CEFR が挙げている産出的言語活動の方略の補償の B1 のグリッドには「母語を学習対象言語の形に変えてみて使ってみて、相手に確認を求めることができる」（前掲 p69）とあり、母語を日本語化（カタカナ表記）しようとしている学習者の様子と重なる。教師として、学習者の達成方略による試みに十分にフィードバックを与えてきたかということを考えなければならないのではないだろうか。

B1 の学習者の特徴として例 17 「マルジ・グラというのはなんでしょうか」といいますと、と新しい情報であることを提示し、説明を加えたり、例 14 のフリッツの場合はフライドポテトと言い換えたりといった読み手を配慮したストラテジーが挙げられる。学習者は、母語の発音を基準にしたカタカナ表記が、読み手に伝わらない可能性があることを考え、読み手に自分の言いたい事を伝えるために説明を加えたり、英語名も併記したりという配慮をストラテジーとして使っている。前述した「フリーツ」はそれが何であるかを説明するという読み手への配慮が欠けたために、誤解を招いた例であると言える。語彙を正しく綴る指導は当然であるが、自文化紹介というタスクの性質上、読み手が理解できるように十分な説明をするという指導も、必要となる。また教師が学習者の文化を知らない読み手として、説明が不十分な点などのフィードバックをする事も重要である。

3. まとめ —指導項目への提言—

B1 の学習者のカタカナ語の綴りに発生する誤用を観察してきたが、学習者が身近なテーマであれば、読者が理解できる文章が書け、語彙の綴りもほとんどの場合混乱を招かぬほど正確に書けるようになるためには、どう指導したらいいのか、また複言語主義に基づいたカタカナ語の習得の可能性について事例分析をもとに考えてきた。

教師として振り返らなければならない事は、まず日本の文化を受容するだけでなく、学習者が大学新聞の記事でとりあげていた観光地や郷土料理、もしくは歴史について日本語を使って発信するというタスクを十分にやってきたかという事ではないだろうか。その視点に立って、B1 レベルとして、自文化を語るための必要度の高い基礎語彙を選出し、定着を目指すタスク作成が求められるだろう。

それから、既習の語彙においても誤用や不注意によるミスが見られたが、作文を書き終えた後に、ミスがないか必ず確認する習慣を教師が指導することが大切である。また文章を書くときに既習の言語知識を生かして、読み手に伝わるように書くには、どうしたらいいのか、常に学習者に考えさせる機会を持つことが大切であろう。モニタリングと修正のグリッドの B1 と B2 の違いは、修正に指摘が必要か、もしくは学習者自身で意識的にモニタリングし、自身で修正ができるかという事である。B1 の学習者が自立した言語使用者となるよう、また複言語主義の概念を日本語でのコミュニケーションに活かせるよう、方略の面でも教師の支援が大切なのではないだろうか。

注

1 坪根らは『日本語かな入門』の中の「外来語の表記のしかた」を引用して、外来語表記のル

ールをまとめている。誤用が多くみられた長音と促音のルールについて挙げてみる。

長音のルールは以下の通りである 1)-ar,-er,-ir,-ur,-or,(例:car)、2)-ee,-ea,-al,-oa,-ou,-au,-oo-,(例:speed)、3)-all,-al,-ol,(例:call)、4)-w,-y,(例:show)、5)-a-e,-o-e,-u-e,(例:case)、6)-ation,-otion,(例:inflation)、7)-ire,-ture,(例:hire),促音のルールは以下の通りである 1)-ck,(例:back)、2)-x,-tch,-dge,(例:tax)、3)-ss,-pp,-tt,-ff,(例:message),4)-at,-ap,-et,-ep,-ip,-op,-og,-ic,-ot,etc.(例:mat), 5)母音が重なるもの-oo,-ea,-ou,-ui-(例:book)

<参考文献>

国際交流基金 (1976)『日本語かな入門』凡人社

坪根由香里、鈴木理子、阪本史代、神谷道夫 (2001)「学習者から見た効果的な語彙の指導法・

学習法—アンケート結果より—」、『小出記念日本語教育研究会論文集』第9号

中山恵利子、陣内正敬、桐生りか、三宅直子 (2008)「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」、日本語教育、138号、pp.83-91

吉島茂・大橋理枝 他(訳) (2008) 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠、朝日出版社